

現場監督が1.5年で一棟を任される理由

商品規格×生産ライン×固定協力業者が生む“育成の高速化”

進和建設工業株式会社(本社:大阪府堺市、代表取締役会長:西田芳明)では、入社から約1年半で、若手現場監督が一棟を担当する体制を構築しています。建設業界では、現場監督が一人で現場を任されるまでに5年~10年かかることが珍しくない中、同社は業界の常識にとらわれない育成モデルを実践しています。

この早期育成は、個人の能力や根性論によるものではありません。背景にあるのは、「商品としての建築」と「現場管理の仕組み化」、そして協力業者との長期的パートナーシップです。

■理由①:建物を“商品”として規格化している

進和建設のマンションは、設計・仕様・工程があらかじめ商品化されています。代表的なRCマンション商品では、構造・納まり・設備仕様・工程の流れまでが標準化されており、オーナーの要望は「オプション」として切り分けられます。

一般的なゼネコンでは、現場ごとに設計条件や仕様が異なり、監督は長時間図面を読み込み、工程を一から組み立てる必要があります。一方、進和建設では「標準+差分」という考え方により、監督が把握すべきポイントが大幅に削減されています。

■理由③:逆算日報による“人工管理”的徹底

現場では、単なる作業日報ではなく、「逆算日報」という考え方を採用しています。あらかじめ

工期

必要人工 (人日)

を決め、その範囲内でいかに早く、少ない人工で終わらせるかを現場監督が考えます。
この仕組みが、工期短縮・品質安定・協力業者の利益確保を同時に成立させています。

■理由⑤:協力業者も“商品と工程”を理解している

進和建設は、協力業者を頻繁に入れ替えません。長年取引してきた固定協力業者が、進和の仕様・生産ライン・工程感覚を共有しています。

そのため、

- ・ 現場監督・会社上層部・施工チーム(職人)が、工程や進捗を三層で確認する体制ができている
- ・ 次工程を見越した提案が職人から出る
- ・ 業者同士が工程を確認し合う

といった状態が生まれています。

■1.5年で現場を任せられるのは「仕組みの結果」

進和建設で若手監督が約1年で現場を持てるのは、決して属人的な能力や無理な責任転嫁によるものではありません。

商品としての建築 × **工程のライン化** × **数字に基づく現場管理** × **協力業者との長期的なパートナー関係**

これらを会社全体のインフラとして積み重ねてきた結果です。進和建設工業は今後も、建設業界における「人が育たない」「現場が属人化する」という課題に対し、仕組みで解決する建設会社として挑戦を続けてまいります。

お問い合わせ

■理由②:工事を「生産ライン」で管理する仕組み

進和建設では、RCマンションの建設工程を9つに分解しています。



各ラインには標準日数と作業サイクルが設定されており、例えば躯体工事は「1フロア10日ピッチを目標」といった形で管理されます。これにより、若手監督でも「次に何が起こり、いつ業者が入るか」を工程表レベルで即座に理解できる構造になっています。

■理由④:現場監督の仕事を「3原則・3作業」に絞っている
進和建設では、現場監督に求める役割を明確に定義しています。

現場監督の三大原則

- 1.現場を常にきれいに保つ
- 2.残工事を出さない
- 3.工期を厳守する

現場監督の三大作業

- 1.墨出し
- 2.施工図作成
- 3.工程・品質写真の管理

これらを徹底的に身につけることで、「判断に迷わない」「仕事の軸がぶれない」現場監督が育ちます。

■若手現場監督コメント



建設部
能見竜馬
(入社2年目)

私は大学では文化系の学部出身で、建築は未経験のまま入社しました。現場を任されるまでに何年もかかると思っていたため、入社1.5年ほどで現場を任されると聞いたときは不安もありました。ただ、進和建設では仕様や工程が商品として整理されており、「今何をするか」「次に誰が入るか」が明確です。その仕組みがあるからこそ、文化系出身の私でも現場監督として仕事ができていると感じています。

商品としての
建築



工程の
ライン化



数字に基づく
現場管理



協力業者との
長期的な
パートナー関係

0

1

2

3

4

5

6

7

8

杭工事

基礎工事

土間工事

躯体工事

内装前準備

内装工事

外装工事

仕上げ工事

設備・外構工事

工期

必要人工
(人日)

現場監督の三大原則

1. 現場を常にきれいに保つ
2. 残工事を出さない
3. 工期を厳守する

現場監督の三大作業

1. 墨出し
2. 施工図作成
3. 工程・品質写真の管理